石巻市震災遺構門脇小学校で、館長のリチャード・ハルバーシュタットさんと学芸員の高橋広子さんの話を聞く多賀城市立東豊中学校の中学生記者

記憶のバトンつないで

今できることプロジェクト

震災伝承新聞

発行　河北新報社営業局　2023.2.11

中学生記者 被災地駆ける

東豊中　石巻と女川へ　2
八乙女中　亘理・荒浜、鳥の海へ　3
閖上小中　東松島視察、地元では　4

東日本大震災の発生から12年。河北新報社の復興支援企画「今できることプロジェクト」では、次世代への伝承啓発のため、今年で3回目となる震災伝承新聞の制作に取り組みました。幼少期に発生した震災の記憶が定かではない中学生が被災地を訪れ、あの日から今に至る歩みを学び、発信する企画です。本特集は仙台市立八乙女中学校、多賀城市立東豊中学校、名取市立閖上小中学校の3校の生徒26人が記者として被災地取材に挑戦、それぞれの視点で記事化したリポートです。震災の記憶と教訓を、世代を超えて未来へ―。学校や家庭、職場でご一読いただき、伝承のバトンをつないでいただければ幸いです。

東松島市「空の駅」で、おのくん作りに挑戦する閖上小中学校の中学生記者

宮城県亘理町荒浜産ののりを使ったパスタを食べる八乙女中学校のメンバー。乾（ほし）のりは2年連続で今年も皇室献上の栄誉を受けた

石巻市震災遺構門脇小学校展示館で、津波火災で燃えた学習机を取材する東豊中学校の中学生記者

私たちも、再生と伝承のために「今できること」をともに考え、このプロジェクトを推進していきます。　河北　今できること　検索　facebookページもあります。

IHI Realize your dreams
Asahi
石巻市震災遺構 門脇小学校・大川小学校
岩手日日新聞社
NTT DATA 株式会社NTTデータ東北
ORIX オリックス 仙台支店
よろこびがつなぐ世界へ KIRIN
ケーズデンキグループ デンコードー
劇団四季
KBT 光輝ビルテクノス株式会社
乾杯を もっとおいしく。 SAPPORO
SUNTORY
JTB 感動のそばに、いつも。
―信用と創造― 住友不動産
一般社団法人 生命保険協会 宮城県協会
大和証券 Daiwa Securities
dic Color & Comfort DICグラフィックス株式会社
伝承千年の宿 佐勘
TOSHIN 東伸環境株式会社
NISHIKIYA KITCHEN
日本製紙株式会社
日本製紙クレシア株式会社
一般社団法人 日本損害保険協会 SONPO
あしたを、つなぐ ── 野村不動産グループ 野村不動産
東日本油化工業 株式会社
弁護士法人 平松剛法律事務所 Hiramatsu Go Law Office
FUJISAKI
FUJIFILM Value from Innovation 富士フイルム グローバル グラフィック システムズ株式会社
みちのく企業グループ
三井不動産 MITSUI FUDOSAN
人を、想う力。街を、想う力。 三菱地所グループ
三菱重工機械システム
一般社団法人 宮城県建設業協会
車検・点検はセーフティーステッカー運動実施中の会員工場へ 一般社団法人 宮城県自動車整備振興会
明治安田生命
RICOH imagine. change. リコージャパン株式会社
Rethink PROJECT
河北新報社
（順不同）

◎後援／宮城県、福島県、仙台市、石巻市、気仙沼市、多賀城市、名取市、東松島市、南相馬市、亘理町、女川町、浪江町、双葉町、宮城県市長会、宮城県町村会、宮城県教育委員会、仙台市教育委員会
◎協力／一般財団法人 3.11伝承ロード推進機構

今できることプロジェクトとは・・・　東日本大震災が発生した翌年2012年より、震災の伝承や防災啓発、風化の防止を目指して取り組んでいるプロジェクトです。毎年、河北新報社が読者と賛同企業とともに「何ができるか」を考えアクションしており、真の復興を果たすべく継続して取り組んでまいります。

東豊中新聞

津波火災の教訓伝える

多賀城市立東豊中学校
宮城県多賀城市笠神
五丁目4番1号
生徒：219人

私たち多賀城市立東豊中学校の2年生9人は、昨年10月14日に石巻市と女川町を訪ね、被災された方や復興に取り組む人を取材しました。津波火災の痕跡を伝える唯一の震災遺構門脇小学校（石巻市）で、迫る火災から逃れた住民の避難行動について学び、教訓を得ました。ボランティアの女性が創業した「巻組」が事業を通して目指す「より良い暮らしづくり」に感銘を受けました。津波にのまれ行方不明になった妻を探し続ける男性の話には、胸を締め付けられました。

貞観地震（869年）にともない発生した津波とそれ以前にも石巻を襲った津波の痕跡について、高橋さん（右）から説明を受ける中学生

石巻市震災遺構門脇小学校
とっさの判断 命を救う

【2年五十嵐春也・大日向美咲・畑山眞穂・松浦歩】

石巻市門脇町にある震災遺構門脇小学校。一般公開は2022年4月に始まりました。鉄筋コンクリート3階建て校舎の破れてほとんど残っていない窓ガラス、焼け焦げた塗装がむき出しになった壁面が震災の恐ろしさを物語ります。

あの日、この学校に起きたことや、児童らがどのように避難したのかなどを館長のリチャード・ハルバーシュタットさん(57)と市震災伝承推進室の高橋広子さん(48)が教えてくれました。

海から直線で700～800㍍に位置し、日和山の裾に立つ門脇小は、被災した姿をそのまま伝える「本校舎」、展示館の「特別教室」と「屋内運動場」の三つに分かれています。炎上したまま津波で押し寄せた家屋や車により、海側に立つ本校舎で火災が発生しました。

津波の高さは床から約1・8㍍でしたが、炎は上へと延焼し、本校舎は1階から3階まで全焼しました。震災発生時、校舎には児童230人ほどと教職員がいました。児童らは日ごろの訓練通り地震発生の15分後、裏山に避難しました。

児童らが避難した後、門脇小に避難し、本校舎屋上に集まっていた地元の人たちは、火災の発生により裏山に逃れようとしました。

裏山の斜面には校舎2階部分が最も近いのですが、飛び移るのに少し距離がありました。教職員らが教壇を橋にすることを思い立ち、降りしきる雪で滑らないよう教壇に毛布を敷くなどして、全員が脱出しました。

体育館に逃げていた人たちも脱出ルートを探す中、校舎2階から日和山に渡してあった教壇を発見。教壇を運んではしごのように斜面に立てかけて上り、避難に成功しました。教壇を使った避難を選択したとっさの判断が人々の命を救ったのです。

ハルバーシュタットさんは「津波のとき、高台への『水平避難』が間に合わなければ『垂直避難』が有効とされていますが、火災が発生した場合、屋上など高い場所が絶対安全とは限りません」、門脇小の展示内容を担当した高橋さんは「大きな被害を受けた石巻で、人々が何を思いながら過ごしてきたのか―。伝えきれない思いを、遺構と展示を通して多くの人に伝えたい」と話しました。

門脇小には天板が焼けた机、石巻市全体の被害状況を示すパネル、押しつぶされた消防車、生活の様子が残された応急仮設住宅などが展示されています。

「起きたことから何を学ぶか。答えが出なくても、考えることが大切です」と高橋さんは言います。私たちは震災や震災を経験した人たちから何を学び、どのようなことを次の世代に伝えていくことができるでしょうか。

女川の高松康雄さん
「潜水士」取得 不明の妻捜す

【2年神野心希・堀江桜太】

宮城県女川町のダイビングショップ「宮城ダイビングサービス・ハイブリッジ」が営業を開始したのは2012年7月。東日本大震災後、ダイバーとして行方不明者の海中捜索や、がれき撤去などのボランティア活動に取り組んできた仙台市出身の高橋正祥さん(43)が経営しています。

高橋さんは震災当時、神奈川県葉山町のダイビングショップでインストラクターをしていましたが、石巻市に移住して起業しました。「復興していく海を、多くの人に見てもらいたい」という思いから、ダイビング教室を開いて観光客の呼び込みに力を入れる一方、時間を見つけて捜索活動を継続。年間300日以上潜っているといいます。

そのような高橋さんの指導を受けて、女川町の高松康雄さん(66)は潜水士の資格を取りました。津波にのまれ、今も行方不明の妻・祐子さんを捜すためです。宮城海上保安部の潜水士による捜索活動を見守る中で、「自分も捜す。人任せにしたくない」と思い立ったそうです。

震災発生時、祐子さんは勤務していた町内の銀行支店屋上に避難したものの、巨大な津波にのまれました。津波にのまれる直前、高松さんに届いたメールには「帰りたい」とあったといいます。

祐子さんは、おっとりとして優しい人だったそうです。あの日の朝、高松さんが祐子さんを勤務先に車で送り届けたとき、祐子さんから「今夜のおかず、何がいい？　何でもいいはダメ。困るから」と言われました。これが最後の会話になりました。

「いつもの何でもない会話。それが当たり前ではないことを、失ってから気付く。当たり前があることは、幸せなこと。当たり前を大切にしてほしい」。高松さんは、こう教えてくれました。

ダイビングは海中で体のバランスを保つことがとても難しいそうです。海水の透明度が低いときは、周りがよく見えません。「潜るのが怖いときもありました。ボンベから酸素が来なくなったら―など不安がよぎり、とても緊張しました」と振り返ります。

それでも強い思いが高松さんの背中を押し続けました。「海にいるであろう妻を、必ず家に連れて帰る。諦めたくない」。祐子さんが見つかったときは、「お帰り」と声をかけるつもりといいます。

行方不明の妻を捜し続ける高松さん。「見つけたら、『お帰り』と声をかけたい」

交流人口増を後押し
石巻・巻組 民家リノベ 運用

【2年鈴木真央・谷津凪咲・吉田瑞季】

石巻市の旧北上川右岸の市街地に本社がある「巻組」は、建物のリノベーションやシェアハウス事業を展開する会社です。スタッフは20～30代の約10人。震災後に石巻でボランティア活動をしていた渡辺享子さん(35)が2014年、「多様なライフスタイルの受け皿をつくりたい」と創業しました。

私たちは、巻組が築60年超の民家をリノベーションした同市泉町のゲストハウスOGAWAを見学しました。広報担当の平塚杏奈さん(29)によると、OGAWAのオープンは20年12月。木造2階（延べ床面積約150平方㍍）の外観はそのままに、トイレや台所の位置を一新したり、不要になった収納棚を撤去したりして機能性を高める一方、洋室を畳敷きにして民家のぬくもりを演出していました。

利用者は家族連れからビジネスマンまでさまざま。リピーターも多いとのこと。22年に開催されたアートと食、音楽の総合祭「リボーンアート・フェスティバル（RAF）2021－22」のときは期間中（8～10月）、たくさんの団体が宿泊したそうです。

巻組は宮城県内で15棟の物件をリノベーションして運用しています。一般的に収入が不安定な場合、賃貸物件を借りることは難しいのですが、巻組は「借り手と信頼関係があればOK」と敷居を低くして、移住しやすくしています。

事業を展開していく上で大変なこともあります。リノベーションには数百万円単位の投資と、3カ月から1年ほどの期間が必要ですが、収入が発生するまでにはタイムラグがあります。予想以上に建物が傷んでいることも。輸入木材の価格高騰（ウッドショック）もありました。

「大変なことはいろいろありますが、巻組の目標は『より良い暮らしづくり』。石巻で人を巻き込みながら、巻組と石巻の魅力をアップさせていきたい」と平塚さん。「住宅をリノベーションすれば借り手が現れるわけではありません。人が集まるコミュニケーションづくりが大切です」と教えてくれました。

石巻市出身で、大学で移住定住をテーマに研究していた平塚さんは卒業後、地元金融機関に就職しました。巻組の活動を知り、21年に転職。「万人受けする事業ではなく、ニッチなニーズですが必要とする人はいます。可能性を信じています」と言葉に力を込めました。

平塚さん（左）が、シェアハウス事業や空き家のリノベーションといった巻組の取り組みを説明した

聞いて！　知って！　同世代へのメッセージ

語り継ぐのが復興支援　五十嵐　春也　2年

今回の取材で気づいたことは、震災で何があったかを語り継いでいくことが、私たちにできる最大の復興支援ということです。私は震災当時2、3歳で震災の記憶がほとんどありません。ですが、実際に震災を経験した人から学び、震災を知らない人に伝えることはできます。震災を体験した人はいずれ亡くなってしまいます。私たちは震災を体験した人からバトンを受け取り、震災で亡くなった人たちの無念を胸に刻みながら、バトンを次の世代につないでいくことはできます。次の世代、その次の世代の人たちの命を守れるようにするのが、私たちの責務だと感じました。

伝えれば救える命ある　大日向　美咲　2年

このプロジェクトに参加して特に大切だと思ったことが一つあります。私たちには「伝えていく」使命があるということです。当時の私たちは2、3歳で記憶がない人がほとんどですが、今回のように震災を経験した人たちの話を聞いて、それをバトンのように次の世代につなぎ、伝えていくことが大切だと思いました。自然災害はいつ、どこで起きるか分かりません。私たちが教えてもらったこと、経験したことを次の世代に伝えることで救える命があるはずです。これからは「伝えていく」という使命があることを意識して生活していきたいです。

被災地のイメージ一変　神野　心希　2年

私は震災の恐ろしさについて、分かったような気になっていたのかもしれません。学校の特別授業で震災を体験した人を招き、当時の写真を見たり、被災体験を聞いたりする機会はありました。「震災はこんな感じだったのか」と、なんとなく考えてきました。しかし、実際に被災地を取材すると、イメージと違っていました。実際に行く、実際に見るということの大切さを知りました。門脇小校舎を見たときは「え？何これ。こんなひどいの？　あれが黒板？　あれが机？」。私の被災地に対するイメージが一変しました。地震は私たちのイメージより、何十倍も怖いものかもしれません。

被害伝え 繰り返させぬ　鈴木　真央　2年

地震や津波とはこんなにも恐ろしく、大きな被害を引き起こすのだと実感しました。震災のことは記憶にありませんが、取材を通して当時の状況や、その後の出来事をより詳しく知ることができました。特に門脇小では大きく壊れた校舎や、焼けただれた教室内部を見て、「災害はこんなにも簡単に日常を破壊するのか」と驚きました。今回学んだことを教訓に、同様の大災害が発生したときに備えようと思いました。そして震災の悲劇が繰り返されないよう、周囲の人に震災の怖さを伝えるとともに、私が大人になったら自分の子どもに震災のことを伝えたいと思いました。

被災者を苦しめる記憶　畑山　眞穂　2年

震災の経験は人々の記憶にとても強く焼き付いていて、発生から10年以上経過した現在も、心を苦しめているということを感じました。すごく怖いなと思いました。そして、なぜ過去のことをあれほどはっきりと覚えているのかと不思議にも感じました。大切な物、人、家族を地震と津波に奪われたつらい経験が、もう誰にもこんな悲しい気持ちになってほしくないという強い思いになって、深く記憶に刻まれているからなのだと思います。被災した人たちの経験や思いを受け継ぐだけでなく、私の次の世代にもしっかり伝えて震災が風化してしまわないようにしたいです。

頑張る人々の思い知る　堀江　桜太　2年

たくさん優しい人がいることを、今回の取材で学びました。誰かのためにシェアハウスを提供している人たち。復興のためにダイビングをしている人たち。津波の威力を知らせようとしている人たち。誰かのために頑張っている人がたくさんいると知りました。また、あらためて防災の大切さも実感しました。「門脇小」では、避難訓練をしていたおかげで、たくさんの命が助かったことを知りました。ハザードマップを見て、災害時は臨機応変に行動できるように、あらかじめ頭の中でシミュレーションするだけでも防災につながると思います。

過去に学び皆で共有を　松浦　歩　2年

私は10年以上前の東日本大震災で沿岸部の街が津波に襲われたというのは知っていますが、あまり覚えていません。今回のプロジェクトを通じて、またあのような災害が起こったときにどのように対処すればいいのか―ということを学びました。過去の災害から得た教訓を自分の今後に生かし、それを周りに伝え、みんなで共有していこうと思いました。人は大きな自然災害の前では無力です。ですが、そんな自然に対抗しようとみんなで助け合い、震災の被害を減らすことはできます。だからこそ私たちはさらに、助け合うことが求められているのだと思います。

災害時は冷静心掛ける　谷津　凪咲　2年

私が今回の取材を通して感じたことは、避難する場所を選ぶことの大切さです。避難場所によっては門脇小のように津波火災に遭ってしまったり、避難した場所の高さが足りずに津波にのみこまれてしまったりしてしまいます。避難場所によって生死が決まるといっても過言ではないことが分かりました。今後、大きな災害が起きて避難しなければならないときは深呼吸をして、少しでも冷静になれるよう心掛けることにしました。取材で得た知識を生かし、自分の命はもちろん、周りの人の命も救えるように普段から災害への備えを大事にしていきたいと思います。

焼けた校舎 心に残った　吉田　瑞季　2年

取材することにより、あらためて東日本大震災のことを知ることができました。震災でつらい思いをしたのに、涙を流さないで取材に応じてくれたのはすごいと思いましたし、私たちがまだ小さかったとはいえ、震災を覚えてないのが不思議なぐらいです。まだ2歳だったからかもしれませんが、覚えていていいくらい大きな出来事でした。強く心に残っているのは津波と火災に襲われた門脇小です。当時のまま保存されている教室の壁や床は火災で真っ黒、机の天板も焼けて無くなっていて黒板も焼け落ちていました。逃げるのは大変だったろうと思いました。

聞いて！　知って！　同世代へのメッセージ

仙台市立八乙女中学校

仙台市泉区旭丘堤
二丁目１番１号
生徒：474人

私たち仙台市立八乙女中学校の1年生9人は、昨年9月17日に宮城県亘理町で取材を行いました。町内の荒浜地区の観光と防災地図の機能を併せ持った「あらはマップ」作りに携わった人たちから話を聞きました。東日本大震災で大きな被害を受けたノリの生産者による「あらはま海苔(のり)合同会社」で、豊かな海域が、ノリ養殖に大きく関わっていることを教えてもらいました。太平洋を一望する「わたり温泉鳥の海」では、震災当時の様子、その後の施設の再生プランと利用者の安全対策などについて説明を受けました。

防災と観光 拠点一目で

「あらはマップ」亘理・荒浜中生が制作

地域や人の魅力を再発見

【1年佐藤智威・島崎杜和・佐久間菫】

亘理町立荒浜中学校の生徒たちが、東日本大震災で被災した荒浜地区の防災と観光の両方の拠点を紹介した地図「あらはマップ」を作りました。いざというときに備えるための施設や、復興に向けて前を向く商店などを回って作り上げた内容の濃い地図になっています。

作業は「震災から10年」に合わせて2020年12月に始まり、翌年3月に完成しました。広げると、A4の紙4枚分の大きさになるマップには、災害時の対応や観光客向けの地図などが描かれていて、荒浜のたくさんの魅力が伝わるようになっています。

注目は、大津波警報や津波警報が発表された際、避難する方向が地図中に太く赤い矢印ではっきり示されていることです。各店舗の紹介については、生徒たちが聞き取りした内容を手書きで掲載しています。

津波が来た際、命を守る重要な拠点の一つ「防災公園」や9㍍の高さがある「避難丘」などを写真付きで紹介。小学校や中学校といった緊急避難所も載せていて、そこはいざというとき一般の人も外階段を使って屋上などへ上がれるようになっています。

「発見だらけだった」。地図の作製にかかわった当時中学1年生だった木村心(こ)優(う)さんと伊藤聖那さん（3年）は、そう口をそろえました。荒浜を回って写真を撮ったり、地域の人に話を聞いたりしていてそう感じたそうです。

2人は「地図作りを通して荒浜の魅力に自信を持てるようになった。作る際、地域の人の優しさや温かさに気づくことができた」と振り返りました。

「あらはマップ」の製作を荒浜中に持ち掛けたのは、町の活性化に取り組むNPO法人海族DMC。理事長の太見洋介さん(45)は「震災の恐ろしさを世界に発信するとともに、中学生が理解し、次の世代に伝える機会にしてほしかった」と理由を説明します。

地図が完成して2年近くがたちます。木村さんは「今回はアイデアを出しただけだったので、次は生徒たちだけで作ってみてほしい」と話します。伊藤さんも「英語版などもあるといい」と、改訂版へ向け後輩に思いを託しました。

荒浜中での取材を終え、「震災で何が起こったのかを次の世代に伝えること」が、一番大事だということを改めて感じました。

避難丘で太見さん(左)の説明を聞く八乙女中の生徒たち

太見さん支援のもと荒浜中の生徒が作った「あらはマップ」

菊地さん（右から３人目）からのりの製造ラインの説明を受ける生徒たち

合同会社代表・菊地さん

ノリ養殖復活へ手応え

【田畑夏美・髙崎開・佐藤潤之介】

亘理町荒浜と言えば、秋のはらこ飯をはじめ、夏はアナゴ、冬から春はホッキなど豊かな海の幸が有名です。見落としてはいけない大事な海産物がノリです。

荒浜漁港に面した場所に「あらはま海苔合同会社」があります。「あかつき」という品種で生産した品が、昨年1月の宮城県の乾(ほし)海苔品評会で準優賞、今年は優賞に輝きました。

阿武隈川の河口に位置する荒浜の海は、淡水と太平洋の黒潮が交差し、ミネラルが豊富で、色つやの良いノリが育ちます。合同会社は、板のりやばらのりなどを販売しています。

荒浜のノリの生産は、8月中旬に種を網に植え付ける「種付け」から始まります。9月になると波の穏やかな塩釜湾内で芽を大きくする「育苗」を1カ月間行い、その後荒浜の沖合に戻して「本養殖」します。10月から4月までという長い漁期は日本一です。

しかし、ここまでの道のりは大変でした。海に面した荒浜は、震災で家屋や船、工場、機械に大きな被害を受けました。

「何もない、ゼロの状態。気力も湧かない。もうだめだなって。絶望感でいっぱいだった」。合同会社代表の菊地幹彦さん(60)は、悲しそうな目をしながら振り返ります。

知り合いを回るうちに「やるしかないべ」という言葉に勇気をもらったと言います。「自分たちはどうする」「なんとかできねぇか」と、地域の漁業の仲間と話を始めました。

復活を大きく後押ししたのが、国からの補助金。震災前は漁業者ごとに個別に養殖に取り組んできましたが、5人が一体となって2015年に合同会社を設立。省力化のため、ノリを自動で摘み取れるシステム船、板のりを作る全自動の機械を導入しました。

設備を導入するのに要したのは約7億円。グループ化することで補助を受けられ、20年には直売所を設けました。

ノリ養殖の再開に手応えを感じている菊地さんは、知名度アップや商品の売り方、質の向上を常に考え、前を向きます。

私たちは、あらはま海苔合同会社の新たな挑戦を、これからの世代につなげていくことが大切だと感じました。

湯ったり心の復興を

わたり温泉鳥の海 観光地再生の核

【藤原音乃・鎌田壮亮・石森千陽】

客室に入ると、大空と太平洋の青、草の緑が美しい景観が目の前に広がり、心地よい風が吹いてきます。亘理町の「わたり温泉鳥の海」の3階にある特別和洋室は、ツインベッドとテラスに加えて、温泉ひのき風呂があるすてきな空間でした。

町営だった温泉施設は震災後、運営を任されたホテル佐勘(仙台市)によって、レストラン部門が2017年秋、再開し、18年春に宿泊部門と浴場がリニューアル。「町の皆さまと、ともに」という基本コンセプトを掲げ、わたり温泉鳥の海を核とした亘理町荒浜地区の観光地の再生を目指しています。

現在はとてもきれいに見える施設ですが、震災当時は大変でした。当時を知る従業員の寒河江祐介さん(42)は「津波が襲い屋上に上がったときには、周りがすべて海のような状況でした」と、海が徐々に膨れあがってきた様子を語りました。

一番に考えたのは、不安になっていたお客さまや避難してきた住民の安全確保です。全員を4階に避難誘導し、館内では1人の犠牲者も出しませんでした。

停電のため、状況が分からず、翌日は建物を出て阿武隈川の堤防沿いを進むことができた亘理大橋まで歩いて様子を見に行きました。視界に入った岩沼市の内陸まで水浸しでがくぜんとしたそうです。

今は、すっかり施設がきれいになりました。荒浜には、観光地、地元の農産物や海産物などの物販、海水浴場や野球場、サッカー場のにぎわい空間など、たくさんの魅力があります。

支配人の半田英明さん(36)は「町民の皆さまに愛され『また行きたいな』と思えるような施設にしていきたい」と話します。従業員一人一人が防災への心構えを持ち、明るく親切にお客さまに接することを心がけています。

利用者と接していて感じることを尋ねると、半田さんは「心の復興が進んできているように感じます」と笑顔で答えました。天然温泉の存在が、訪れる人の体はもちろん、心も癒やしているのかもしれません。

「わたり温泉鳥の海」への取材を通して、私たちはもっとたくさんの人たちに荒浜を訪れてほしいという思いを強くしました。

支配人の半田さん

震災後、館内が一新した「わたり温泉鳥の海」

聞いて！　知って！　同世代へのメッセージ

学びを伝え未来つくる　石森　千陽　1年

震災当時まだ１歳で、記憶は残っていません。当時の状況を映像や文章で知る機会があっても、震災や津波はおぼろげなものでした。でも今回のプロジェクトを通して、亘理町に行き、被災地で活動している人たちの話を聞き、11年前の３月11日に町に何が起きたのか、そこから復興に向けてどのように前進してきたのか学ぶことができました。私たち中学生が実際に被災地を訪れ取材し、記事として伝承することで、同世代の皆さんにも、一人でも多く防災や町作りに今一度考えを巡らせてもらえればうれしいです。大切なのは、私たちが未来を創っていくことではないでしょうか。

当時の状況や苦労知る　鎌田　壮亮　1年

取材して新聞記事を書く活動は初めてで、どんなことをするのか分かりませんでしたが、取材に応じていただいた方々の話を聞いて、新聞作りに取り組みやすくなりました。取材を通し、当時の状況や復興の過程、地域の人たちが一番苦労したことなどが分かりました。一番の成果は、町の人の気持ちを知ることができたことです。昼食は荒浜産ノリを使った「海苔のクリームパスタ」。磯の風味が感じられて、とてもおいしくいただけました。地域の食材を生かしていることがすばらしかったです。今回、新聞を作ることで荒浜の復興に少しでも貢献できたのではないかと思います。

伝えるため学び続ける　佐久間　菫　1年

今回のプロジェクトは、震災を深く考えるきっかけになりました。当時１歳だった私には、震災の記憶はありません。私のような人に、震災を「伝える」ことが大切なのではないかと、改めて感じました。具体的には、伝えてもらったことを同年代の人、つまり「横」に発信する「伝える」の連鎖をしなければならないと考えるようになりました。他の人に伝えるためには、私自身が震災について知っておかなければなりません。これから次の世代という「縦」にも伝えていくため、何年も東日本大震災を伝え続けていくために、学び続けたいと思いました。

秘めたつらさを伝える　佐藤 潤之介　1年

今回取材して一番印象に残ったのは「言葉にできないほど」という言葉です。よく聞きますが、どんな人がこの言葉を使うのかは分かってはいませんでした。でも、現地の人が泣きそうな目で震災当時のことを強く語ってくれる姿を見て、そういうつらい思いをした人たちがこの「言葉にできないほど」という言葉を使うのだと分かりました。そうしたつらい経験を、震災を経験していない世代の人にも伝えなければいけないと、改めて思いました。今後、震災を経験していない世代に伝えるときが来たら、今回取材して学んだことを生かして、しっかりと説明したいと思いました。

元の姿より先を目指す　佐藤　智威　1年

今回の新聞を作って感じたことは、復興は元通りではなく、元々よりも発展させていくということです。これまで被災地に行くことがあっても、「元通りになってよかった」「仕事を再開できてよかった」としか思っていませんでした。しかし、被災した方々に話を聞いて、「これまで通りの生活に戻るだけではいけない。元々よりも先へ進まなければならない」と考えるようになりました。自分と同年代の方が自分の街について深く考えていることに気づき、自分の街をより発展させるため、小さなことでも協力していくことが大切だと思いました。

前向く人々の姿 印象的　島崎　杜和　1年

震災で大勢の人が亡くなり、言葉に表せないほどの苦しみや苦痛があったことは知っていますが、その時の記憶はありません。取材をして、どこも震災での苦しみやつらさを強く語っていました。どうして僕のような小中学生が、震災のことを当たり前のように知っているのだろう。それは、数多くの人が震災を語っているからです。次は僕たちが次の世代に震災を伝える番なのです。震災の影響は大きく、震災とはこんなにもつらいものなのかということが分かりました。震災で多くの人が悲しみ、苦しみ、亡くなったことを、次に伝承していかなければならないと強く思いました。

深く考える機会が必要　髙崎　開　1年

私が実際に被災地に取材に行って感じたことは、震災を重く見ていたつもりでも実際は震災を軽く見ていたということです。震災で失ったものは多く、精神的にも被害にあった人たちがいて、震災はとても恐ろしい出来事だと改めて実感しました。今回のプロジェクトを通して震災について深く考える機会があり、震災への考えや思いが変わりました。今、一番伝えたいことは震災を深く考える機会を作り、今の世代や次の世代の横のつながりを強くすることです。他学年の人や周りの人と震災について話し合ってみたいと思います。もっと震災について考えを深めていきたいです。

現地の恐ろしさを実感　田畑　夏美　1年

震災当時は１歳で記憶に残っていませんでした。今回の取材で、被災者の人たちはつらい状況を乗り越えて今の町を作っていることを感じました。震災のことは、小学生の頃から授業で教わったりテレビで見たりしていましたが、被災地で話を聞き「恐ろしさ」を実感することができました。震災で大切な物を失い、一からスタートするためにたくさんの苦労を背負い、高い壁を乗り越えてきたのでしょう。震災前に生まれた最後の世代として、震災を経験していない人たちにも今回得た学びを広げていきたいです。取材した私たちだからこそ、率先して広げていくべきだと思います。

語り継ぐ大切さ感じる　藤原　音乃　1年

私が今回の新聞作りに参加してみて思ったのは、メディアで知るのではなく、人から人へ語り継ぐということが大切だということです。震災の状況はネットニュースなどで知りましたが、語り継いでこそ、つらさ、苦しさ、大変さをより強く感じられるからです。取材した方の中には、涙ながらに話してくださる方もいました。ネットで見ていて、震災をもう知ったつもりでいましたが、取材をして自分の知らないこと、分からなかったことがたくさんありました。この経験から、私は震災に対してもっと積極的に情報を集め、全力で復興に協力していきたいと思いました。

聞いて！　知って！　同世代へのメッセージ

閖上小中新聞

名取市立閖上小中学校
宮城県名取市閖上西一丁目25番地
児童生徒：416人
（1年～9年生）

津波避難 命の選択迫る

震災当時 東松島・大曲小5年の雁部さん

「受け止めきれない記憶も後世に」

【8年大保颯槻・齋藤温人・高野柚希】

海まで2・3キロの静かな住宅街にある市立大曲小。当時5年生だった大学生雁部那由多さん(23)は、体育館でバスケットボールの授業中に被災しました。

大曲小の昇降口での体験を説明する雁部さん(左から2人目)

「ゴーという地鳴りがしたんですが、いつも訓練で聞きなれているブルーインパルスのジェットエンジンの音と思って地震とは思わずにいたら、最初は上下、続いて左右の揺れが始まり、体が浮いてしまうほど大きくなっていって、はうことも動くこともできないんです。体育館の天井ボードが落ちて館内は真っ白。皆、最初は泣いていたが、どんどん恐怖の度合いが増してきて、次にどうなったか？笑い出したんです。泣きながら」。いつもの授業の光景が一変しました。

いったん学校近くの自宅へ帰宅したものの、津波が来るのを知って再び学校へ避難した雁部さん。児童は校舎3階への避難を指示されていましたが、体育館で落ちてきた照明に当たって負傷した際の血で赤黒くなった上履きを外靴に履き替えようと、地震発生から約45分後に下駄箱のある昇降口へ降りました。何気なく校庭を見ると、避難してくる人が見えたので、昇降口のガラス扉を開け、外に出たその時でした。

ヘドロが混ざった真っ黒な水が昇降口正面の海側から流れてきて、逃げてきた男の人の足元に到達します。その人は流されないよう、一歩一歩、少しずつ校舎を目指していました。次の瞬間、昇降口左手から川の堤防を越えてきた津波ががれきや車とともに流れ込み、一気に水かさが増します。雁部さんは昇降口の外にある壁を必死につかみ、流されないようにするのが精一杯でした。「一番手前にいた男性が私に手を伸ばしてきましたが、私は手を伸ばしませんでした。ここで壁から手を離したら、自分も流されてしまうと思ったからです」。3日後の早朝、まだ水が残る中を校外へ抜け出し、その人が亡くなっていたのを見つけ、遺体の発見場所に赤い旗を立てていた大人に知らせました。雁部さんは、その時の気持ちを「自分が見殺しにしてしまった」と表現しました。

雁部さん自身も生死の境目にいました。次第に増す水の勢いにあらがえなくなり、壁から手が離れてしまい、津波にさらわれたからです。たまたま自分が開いた昇降口の扉が、水流で閉まるのではなく、開け放たれる方向だったため、泥水やがれきとともに校舎内へ流され、下駄箱によじ登り、そこから階段へ移動できました。「もし、開けた扉が逆向きだったら、私も助からなかったでしょう」と雁部さんは振り返ります。

一人の小学生が直面してしまった、学び舎が人の生死を分ける場所になり、目の前で人命が失われるという経験を、雁部さんは震災後数年間、誰にも話せずにいました。被災の程度や家庭の事情から、人間関係を分断する震災の話題は避ける空気があり、そう指導した先生もいました。その後、中学生になって、生徒会長として発表する機会があり、「震災の話をしてもいいんだよ」と言われて初めて、「そうか、震災の話をしてもいいんだ」と思ったことが、語り部活動を始めたきっかけといいます。

震災から間もなく12年。雁部さんは「大人も受け止めきれない体験をして、それを皆がわかっていたから話題にする必要がなかったかもしれません。でも、そうしていたら地域の経験を知っている人がいなくなってしまいます」と強調しました。

この先、災害で悲しむ人が少しでも減るように、私たちも今ある記憶を後世に届けなければならない。被災した人の思いを無駄にしてはいけないと、強く感じました。

私たち名取市立閖上小中学校の7・8年生8人は、昨年10月15日に東松島市で取材をしました。津波で大きな被害を受けた大曲小学校では、当時5年生だった雁部那由多(かりべなゆた)さんに、地震発生から津波が到達するまでと、その後の避難や学校生活などの話を聞きました。交流施設「空の駅」では、仮設住宅の女性が作り始めた人形「おのくん」について、代表の武田文子さんに伺いました。閖上地区は震災後に防災集団移転し、閖上小中学校は旧閖上中学校よりも内陸側に開校しました。この新聞では私たち自身の取り組みも紹介します。

防災リーダー育成

避難や備蓄 学習テーマに

閖上小中学校に地域の住民が実際に避難し、住民の受け入れや避難所開設などを生徒とともに確認する「地域合同防災訓練」

【7年板垣琉奈・小畑結生】

私たちの閖上小中学校は、被災した旧閖上小と旧閖上中を義務教育学校として再建し、2018年に開校しました。小学校から中学校への学習レベルの向上がスムーズに進むよう工夫されているのをはじめ、「防災」を大きな学習テーマにしています。

その理由について、旧閖上中の教諭として震災を経験した校長の八森伸先生は「震災当時も多くの中学生が周りの支えになってくれました。高校生になると、地域を離れている時間が増えます。災害が起きたら、中学生は大人に次ぐ存在として即座に地元で力になれるし、また、そういう意識を持ってもらえるような訓練を通じ、生徒の皆さんを未来の防災リーダーとして育てていきたいと願っています」と話します。

毎月11日は防災学習日です。年度初めに新しい教室からの避難経路を確認し、防災備蓄を考えるのを皮切りに、月ごとの課題に取り組みます。語り部の方を招いたり、校外に出掛けたり、災害時の行動を実践してみたりです。全生徒全児童が、災害時に3日間過ごせる量の食料を防災リュックに詰めて学校へ持参し、保管しています。避難訓練は、地震・津波だけではなく、火災や不審者対応などあらゆる想定をします。

最大の取り組みは地域合同防災訓練です。実際に地域の方々が学校に避難してきます。その時に、中学生は地区ごとの誘導や受付、物資配布など、避難所開設のための運営側に回ります。簡易トイレや避難所のパーティションの設置、非常用発電機や投光器の稼働の仕方なども地域の方々と一緒に学びます。

校舎の構造も防災対応です。素早く高い場所へ逃げられるよう、階段は屋内2カ所、中庭1カ所、屋外2カ所にあり、階段も廊下も幅広くできています。また、普通教室は2階以上にあります。夜間や休日など教職員がいない時間に発生する災害であっても、住民だけで屋上まで逃げられるよう、地域の方々へ施設の使い方を説明する機会も設けています。

閖上地区は700人以上が犠牲になりました。防災に力を入れた街づくりには、地域と学校の連携が大切です。今すぐにでも、小さなことでも、中学生である自分たちにできることを考え、行動に移していきたいと思います。

おのくん「被災者に希望」

東松島・武田さん 制作通じ交流の輪

世界に27万体の仲間が生まれた「おのくん」の第1号を手に、仮設住宅の女性たちが込めた思いを語る武田さん
＝東松島市の交流施設「空の駅」

【8年鈴木くるみ・得地璃湖、7年針生蒼太郎】

前小野駅前にある交流施設「空の駅」。武田文子さん(72)が「おのくん」への思いを語ります。

おのくんは、2011年夏に入居が始まった小野駅前仮設住宅の女性たちが作り始めたサルの形をした靴下人形。仮設住宅の自治会長だった武田さんは「不安と悲しみの中で、お茶飲み会をしても何日かすると飽きてしまうんです。何かすることはないかと思っていたら、仮設の子供に贈り物として届いたのがソックスモンキー。指導をお願いし、お母さん方が作り方を習って、12年4月20日に誕生しました」と話します。家事の合間に自宅で作り、1日に1～2体完成させるのがやっとだそうです。

おのくんを購入した人は「里親」と呼ばれ、国内はもちろん、台湾やハワイ、インドネシア、オーストラリアなどの海外も含め、27万人もの人の輪が広がっています。17年9月末に仮設住宅が閉鎖され、翌10月1日に「空の駅」ができました。「里親さんがいつ来てもいいように、交流施設は1日も休んだことがありません」と武田さん。小さな神社やベンチ、フォトスポットなど、来場者を楽しませる工夫が凝らされています。

私たちは取材の一環として、人形制作の最終工程である鼻と目の仕上げ作業を特別に体験させてもらいました。作り手のお母さんたちに教えてもらいながら、程よく形が保たれるように綿を入れ、膨らみそうになる布を押さえながらの針仕事は大変で、わずかな縫い付け方の違いが表情の良しあしに直結する繊細さを痛感しました。そんな苦労をして完成させた、世界に一つしかない、自分だけのおのくんはとてもかわいく、自分も里親になれたと思うと、たまらなくうれしい気持ちになりました。

「おのくんを見て、東日本大震災を思い出してほしい。津波が来たら、自分の命をしっかりと守ってほしい。生きていたら、またきっと楽しいこともあるから」と武田さん。皆さんも一度、お母さんたちの思いを託されたおのくんを、手にとってはいかがですか。

ソックスモンキー「おのくん」作りに挑戦した閖上小中学校の中学生記者(手前)。お母さんたちありがとうございました！

聞いて！　知って！　同世代へのメッセージ

伝承への熱意 受け継ぐ

板垣　琉奈　7年

今回、さまざまな方々の話を聞いたことは、自分自身の防災への取り組みや考え方を見直すきっかけとなりました。これまでも学校の防災学習や避難訓練で震災体験を聞く機会がありましたが、講話をしていただいた大人の方々は、当時の記憶が頭に浮かんでおり、辛い思いの中、震災当時に生まれていなかったり、小さかったりした私たちのためにお話ししてくださっているのではないかということに気付いたのです。私と同じ世代の子どもたちも、復興や伝承の担い手として、次の世代のためにできることがあるはずです。より真剣に防災学習に取り組もうと強く感じた取材でした。

支え合える人の力 学ぶ

大保　颯槻　8年

私は今回の取材で、2つの深い学びを得ることができました。1点目は震災による人の心への影響についてです。雁部さんの目の前で人が流されてしまったという話を聞き、本人に直接的な身体への傷がなくとも、心に深い傷を負ってしまうことを考えさせられました。2点目は、復興を通した人とのつながりです。おのくんの制作を体験しながら、被災された方同士が集まり、おのくんの制作に参加することで、辛い中でも、人とのつながりができたという話を聞き、私の中の震災のイメージが変わりました。さまざまな貴重なお話から得られた学びを今後の生活に生かしていきたいです。

怖い話 繰り返させない

小畑　結生　7年

今回のプロジェクトに参加する前は、震災に関してあまり深く考えたことはなく、授業で教わる程度の知識しかありませんでした。雁部さんの話は、怖くて逃げ出したくなりました。学校の外を歩き、話を聞いてメモしているだけなのに、自分のことのように感じました。事前に、怖かったら聞かなくても良いよと言われていたものの、私は最後まで聞きました。なぜなら、自分が今まで知らないまま、目を背けてきたものだからです。震災当時に何があったのかを知り、考えることは、次の災害に備え、自分自身を守ること。プロジェクトで学んだことを周りの皆へも伝えていきます。

風化の防止 決意新たに

齋藤　温人　8年

東松島市の取材は、現場を見て当時の話を聞きながら、自分も当時その場にいたかのように、震災の恐ろしさを実感した体験になりました。雁部さんの話で特に印象に残ったのは「災害は一定のサイクルで繰り返される」という言葉です。災害は予測が難しく、だからこそ、いつどんな災害が起きても、冷静に対応できることが大切です。中学生として、周りの小さい子やお年寄りを支える立場になれるよう、より一層、防災学習に真剣に取り組んでいきたいと思いました。震災を風化させないように、自分たちにできることを少しでも多く見つけ、震災を後世に伝えていきたいです。

未来見据える姿に感銘

鈴木　くるみ　8年

私は、この新聞を読んだすべての人に「辛さを乗り越え、前向きに進んでいる人がいる」ことを伝えたいです。お話を聞いた雁部さんは震災後の一時期、震災の話をタブー視せざるを得なくなり、とても辛い思いをしてきました。しかし、現在は大学で災害社会学の研究をしながら、自身の体験について語り部活動をしています。武田さんは津波で何もかも流され、ただ呆然とするだけだった日々の中に、生きがいを見つけ、震災への想いや願いをおのくんに乗せて世界中へ届けています。頑張っている人たちがいることを、自分の同世代や次の世代にも伝えていきたいと思います。

日常生活の尊さ 再認識

髙野　柚希　8年

取材で最も印象に残ったのは「震災で学校の友達を亡くし、もっと自分にできることがあったのではないかと後悔した」という雁部さんの話です。「ありがとうと感謝を伝えること、ケンカをしたらごめんねということ、おはようとあいさつをすることなど、何気ない人との関わりを大切にしてほしい。家族がいて当たり前に学校に行く日常を大切にしてほしい」という言葉がとても胸に残りました。雁部さんは語り部活動について「何かの時に、少しでも自分の話を思い出して、役に立てばうれしい」と話していました。私も教わったことを周りの人に少しでも伝えていきたいです。

伝承は笑顔守る最善策

得地　璃湖　8年

取材を通して私が目にしたのは、未来に希望をもって今を生きる方々の姿でした。震災で全てを奪われ、残ったのは身一つ。それでも生きていれば、命さえあれば、こうしてまた笑い合える。そう語る姿は、とても輝いて見えました。震災当時2、3歳の私たちにとって、震災はテレビのニュースや学校での防災教育で知るものでした。こうして直接お話を聞き、その場に自分がいるような感覚を味わうことで、改めて命の尊さを学びました。震災の記憶は今、風化しつつあります。私たちが伝承し、後世へとバトンをつないでいくことが、皆の笑顔を守る最善策になると思いました。

被災の実像 認識改めた

針生　蒼太郎　7年

私は震災発生時1歳で、当時の記憶は全くと言っていいほどありません。雁部さんの話は、それまで自分なりに思っていた震災の様子とは全く違うものでした。中でも驚いたのは、震災について話すだけでもクラスメートの間に亀裂ができてしまうほどだったとの話です。また、おのくんの取材では、悲しみの中、皆を元気づけるため、被災地復興のため、そして、震災について多くの人に知ってもらうために立ち上がり、活動したとの逸話に感銘を受けました。次にくるかもしれない大きな災害から「大切な命」を守れるように、まずは、周りの人や家族としっかりと話し合いたいです。

聞いて！　知って！　同世代へのメッセージ